SAPIX 2023

『海よ光れ！３・11被災者を励ました学校新聞』大賞

みんなの海よ、光れ！

４年　Y・Yさん

「かわいい声に、沈んでいた避難所は一気に明るくなりました。」これは震災直後に大沢小学校の低学年の子どもたちが「肩もみ隊」を始めたときの様子だ。この一文を読んだ瞬間、私の心の中に青い海がパーッと広がった。

二〇二〇年春、新型コロナウイルスの影響で、卒園式も入学式も縮小された私は、この本を読むまで、自分たちの学年が世の中で最も不運で無力だと感じていた。

二〇一一年の東日本大震災で被災した大沢小学校の子どもたちと自分が重なった。津波がおそい、学校は避難所となり、遠くへ避難した子もいたが、卒業式や入学式が行われ、学校新聞も再開された。学校新聞の手書きの文字は力強く、復興を伝える記事は希望に満ちていた。さらに、肩もみ隊の活躍も見事で、私と同じ小学生が他人の役に立とうと頑張っている姿に胸を打たれた。子どもたちの元気さが暗い状況を変えた。厳しい環境なのに、子どもの存在そのものが大切な役割を果たせるのだと知り、子どもだから何もできないと思いこんでいた私も、なぜか自信を持てた。

今年の夏休み、岩手県陸前高田市を訪れ、地元のタクシー運転手さんから復興の経過について聞く機会があった。山を削って造られた高台には新しい住宅地や商店街が出来ていたが、商店街に所々空き地があるのが気になった。運転手さんが「もどって来ない人も多いからね。」と、つぶやいたとき、私はハッとした。よそへ移住した人だけでなく、亡くなった人や行方不明者もいるのだ。運転手さんは、しばらく辛くて震災の思い出を全く語れなかったと言っていたが、十年以上が経ち、やっと周りにその経験を伝えることができるようになったとも教えてくれた。この強い心の変化は、震災当時大沢小学校の五、六年生だった子たちが十二年後に学校新聞の号外を作ったたくましさと共通しているように感じた。目の前に広がるリアス海岸は、かつて大きな津波がおそったとは思えないほど、おだやかだった。子どもたちが楽しそうに泳ぐ海水浴場やカキの養殖いかだも見えた。

この本を通じて被災地の復興を目の当たりにし、自分は不運ではないし、何かできるはずだと気づかされた。未来に向かって前進する勇気をもらった。

被災地のみんなのために、海よ光れ！私の心の中の海も光れ！そう強く祈った。